平成30年度アマノリ養殖概況

加藤慎治

例年育苗が開始される10月下旬から11月初旬にかけての海水温は水産研究課鳴門庁舎の汲み上げ海水で平年並みであった。しかしながら，今漁期は11月中旬以降の水温降下が鈍く，また育苗期間中に著しく漁場の栄養塩が減少するなど網管理に苦慮する場面が見られた。12月以降順次本養殖が開始されたが，例年に比べて漁場の水温が1～2℃高く推移したことに加え，降雨や日照量も少なかったことから出庫後のノリ芽に生理障害によると思われる”ちぢれ”や”くびれ”が多く見られた。また，生理障害により傷んだノリ芽に付着珪藻のリクモフォラが大量に着生したことにより生育不良となり，秋芽網はほとんど生産に結びつかなかった。年明け以降冷凍網に切り替えた県北漁場では生産が継続されたが，1月中旬にユーカンピアが大発生したため，県下ノリ漁場全域のDIN濃度が1 μg-at/L以下になった。県北漁場ではDIN濃度が低いなか4月まで生産が続けられたものの，南部漁場では栄養塩の回復がなく，漁場環境の好転が見込めないことから網揚げが進みそのまま終漁となった。

平成29，30年度の徳島県漁連共販数量の経月変化を図1に，年度別に共販数量と平均単価の推移を図2に示した。漁期初めからの生育不良により12月の共販枚数は0枚であり，以降も3月を除き非常に低迷した。前年比については，1月が2％, 2月が26％，3月が110％，4月は24％であった。秋芽網の不振と漁期を通じて発生した色落ちの影響が大きい（図1）。

平成30年度漁期の共販枚数は14,997千枚で，前年比28％と大幅に減少し過去最低の枚数となった。平均単価は，全国的なノリの不作を受けて10.49円（前年比105.2％）であった（図2）。

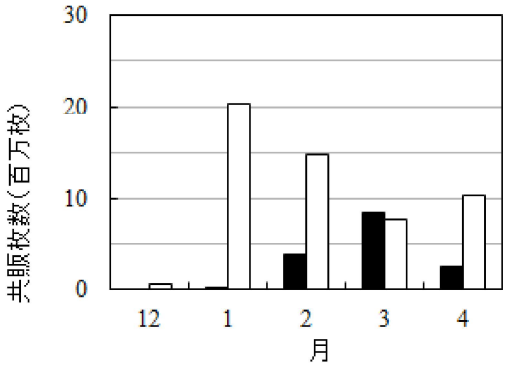

図1. 共販枚数の経月変化

□:平成29年度；■：平成30年度

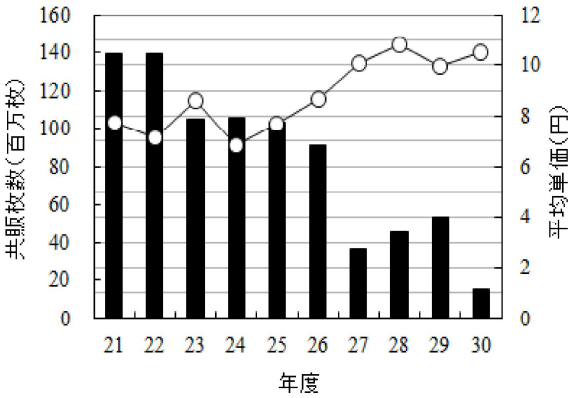

図2. 年度別共販枚数と平均単価の推移

■:共販枚数, ○:平均単価